

書評



『美しい国へ』

安倍晋三著

二〇〇六年、文春新書

格差の拡大、固定を許さない

岩橋法雄

編集委員からイギリスの教育改革やその動向と関わらせて書評することを依頼された。

だが、イギリス教育事情に言及する紙幅に制限の出ることを承知しつつも、ぜひ映画「ALWAYS 三丁目の夕日」に触れさせてほしいと頼み込んだ。とい

うのは、安倍晋三氏がイギリスの元首首相サッチャー女史の断行した教育改革を称賛し、自らの教育改革提言のモデルとしていることと、本質は同じだからである。

この映画は、昭和三十三年（一九五八年）の東京の下町を舞台とし、そこに暮らす人々の温かな交流を描いている。だが、昭和三〇年代は、安倍氏がいうような「物はないけど、心は豊かだったあの時代」とノスタルジックに振り返るような時代ではなく、物は増え始める時代であり、「持てる者」と「持たざる者」との格差が拡がり始める時代であった。そして、自分の子どもには「物」を持たないことからくる惨めさ、差別感を味あわせないために、「物」を持つことを価値基準に追われていく時代（高度成長期）の始まりなのである。そして、昭和三十三年は学習指導要領が「基準」化され、そして二年後には全国一斉学力テス

トが実施され、テスト主義教育が推進されていく。教師はその達成を勤務評定により強制される。

さて、イギリスには階級・階層格差が根強く残っている。だが、同時に、それに抵抗し、労働者階級自身の生活とラ・イフスタイルを守ろうとする土壌がある。物が無いなら無いなりに、我々の生活ができていればそれでいいさ、「奴らとは違う」という文化が存在する。そして、「別な（奴らの）世界」の価値基準で社会移動しようとは思わない。サッチャーは、この労働者階級の社会文化枠組みを打破して、能力主義の二元的価値観で競争する「私」個人を創出し、経済成長至上主義のシステムに寄与させようとしたのである。こうして産み出されたのが当時ヤッピー（yuppy）と呼ばれた新中間層である。中間層全体の拡大である。まさに、日本の高度成長期をお手本にし

たともいえるのである。

さて、全国統一カリキュラム、それに基づく七歳、一一歳、一四歳、一六歳の統一試験、そして大学進学のための一八歳の試験と、まさにテスト主義が横行する。このテスト結果は、学校の教育力をはかるものとして公表される（リーグ・テーブル）。リーグ・テーブルとは、もともと勝ち負けが即チームの興行成績に響くサッカーの勝敗表である。まさに教育を非常な勝ち負けの世界に露骨に投げ込んだのである。そこでは、優秀な生徒を多く集めた学校が生徒数に応じた財源を得ることができるので、ますます教育条件が確保され、さらに優秀な生徒を集めていく。そうでない学校は結局、廃校という脅威に晒される。つとに指摘されていたことだが、「成績優秀校」の周りには裕福な家庭が引っ越してくる。そして、その地域は不動産が高騰する。

『エコノミック・ジャーナル』（二〇〇六年三月）もその異常さを指摘せざるを得なかった。高騰すれば、ますます移動できない家庭は取り残され、経済的・文化的格差による地域分断が生じる。安倍氏の言う「パウチャー制」はこういう競争主義的な「私」個人として、人間個人を地域の連帯から切り離す事態を生むのである。「三丁目の夕日」で安倍氏が夢想した（地域の人々の温かい結びつき）が、なんと空疎に響くことか。決して「美しい国」にはならない。

ところで、イギリスは三王国（スコットランド、イングランド、ウェールズ）と北アイルランドとからなっているが、イングランドをのぞいて、一一歳の統一試験は廃止されている。また、ウェールズでは、二〇〇一年に学校別の成績結果の公表を止め、今では一四歳までの統一テストの廃止を決めている。イングラン

ドでも、見直しの声の強さに、七歳時のテスト結果の公表は廃止の方向を打ち出した。サッチャーの新自由主義的教育「改革」を推進してきた保守党自身が、野党に下った今日、行きすぎた能力主義教育に対する国民諸階層の反発に敏感に反応し、公共政策としての教育政策の見直しを提唱した。

ここまでイギリスの教育「改革」を反省させてきたのは、可視的な階層差別に対する抵抗としてのエネルギーが、社会的公正を求める民主主義の力として作用し、能力主義的価値基準の二元的支配の浸透を押しとどめたからといえよう。しかし、日本では、能力による格差を当然視する観念も浸透しやすい。そして、能力獲得にあたっての本人の努力を既に規定している経済的、社会・文化的条件に対する社会的公正の施策が放棄され、失敗も成功も含めて能力獲得の自己責任

が強調されるならば、「失敗者」には「仕方ないでしょう」「現状を受け入れなさい」と言っているに過ぎない。イギリス以上に、格差は拡大し固定化されることになる。安倍氏の唱道する「再チャレンジ」はまったくの絵空事でしかないと、実感しているのは私だけではないだろう。

(いわはし・のりお 琉球大学法文学部)

